

研究倫理委員会 年会企画報告

研究倫理委員会企画・研究倫理ランチョンセミナー

【私たちはどのように自分の論文を発表すべきなのか？：
変化しつつある学術雑誌の動向を探る】

- 日 時：2021年12月3日(金)11:45~12:45
- 会 場：第5会場 (パシフィコ横浜 会議センター3階「304」)・オンライン
- 参加者数：296名
(現地参加119名・オンライン参加177名)
- 講 演：Matthew Lane
(Oxford University Press、日本支社)
湯浅 達朗 (Genes to Cells 編集室)

今回は、これまでのフォーラムからランチョンセミナーに形式を変えての開催になりました。内容としては、私たちが自身の論文を投稿する場合、あるいは他の研究者の論文を査読する場合に必ず関わることになる、学術雑誌の最近の動向について、実際に学術雑誌の出版に関わる2名の専門家に講演をしていただきました。

まず第1部として、Oxford University Pressの日本支社で英文学術誌の編集を担当されているMatthew Laneさんに「Plan Sとオープンアクセスの方向性」というタイトルで講演してもらいました。Plan Sとは、そもそもcOAlition Sという2018年9月に結成された助成団体の連合が、オープンアクセスへの移行の加速を推進させるために提案した仕組みであること、最初の実行ガイドンスでは、図書館の購読費用に加えて著者がオープンアクセス費用を支払って出版する、いわゆるハイブリッド誌での出版を認めないという極端な姿勢を打ち出したため、出版社から大きな反発があったという背景を説明してくれました。その後、2019年にそのガイドンスが改訂され、ハイブリッド型からオープンアクセスで出版するモデルへ転換するための契約、いわゆる「Transformative Agreements」に含まれていれば、移行期間に限ってハイブリッド誌での出版も認めるようになったこと、Plan Sの開始が2021年に延期され、助成団体によってはすでに適用が始まっている現在の状況についての説明がありました。今後の方向性としては、大学の図書館や研究機関が出版社に雑誌の購読費を支払う現在の体系から、購読費用とオープンアクセス費用を一緒にした契約を結び、徐々にオープンアクセス化を促進する「Read & Publish 契約」が増加してくる考えられます。また、オープンアクセス化を促進するためのOxford University Pressの取り組みの紹介や、Read & Publish 契約にも問題があり、今後も長期的に持続可能

な方法を模索する必要があることを説明していただきました。まだ流動的な状況ですが、Read & Publish 契約が拡大すれば、研究者が限られた研究資金の中から高額なオープンアクセス費用を支払っている状況は徐々に改善されるのではないかと考えられます。

第2部では、「組織的にニセ論文を「製造」しているpaper mill」というタイトルで、Genes to Cells 編集室のマネージング・エディターである湯浅 達朗さんに講演してもらいました。Paper millとは、主に中国で暗躍する、不正論文作成業者のことを指す名称であり、論文原稿の作成から投稿、出版に至る全ての過程を代行するサービスを提供していること、また、中国の病院の医療職では論文出版のノルマが課され、論文によって昇進やボーナスにつながるという背景があるということを説明してくれました。実際にそのようなPaper millの業者がどのように顧客にサービスを提供しているのかについての具体的な説明から、Paper millのおかげでどれだけ雑誌の出版に関わる人が迷惑を被っているのかについて、さらに、Paper millによって作られた論文としてリトラクトされた論文の図を示しながら、Genes to Cells 編集室では、どのようなポイントに着目してPaper millによって作られたと推測される論文を見分けているのか解説してくれました。2021年11月の時点でGenes to Cells 誌に投稿された約260報の論文のうち、少なくとも180報はPaper millによって作られた論文と推測されるという状況は、看過できない異常な事態だと思われます。もちろん編集室という立場でこのPaper millに対応しているという事情はあると思いますが、このような不正論文のために科学全体が悪影響を受けているという状況を一般の研究者の皆さんに理解してもらい、そのような商売が成り立たないようにしていきましょうという、参加者への湯浅さんの最後のメッセージが印象的でした。

これらの講演の後に、理事長と研究倫理委員に登壇していただき、講演についての簡単な意見を話してもらいました。研究不正の根深い状況を踏まえて、まとめて対策するような機関が必要なのは、という白髭理事長のコメントから、研究不正に対処する立場から、今回の講演は非常にためになった(佐谷委員)、Plan Sや図書経費高騰の状況を踏まえて、国やJSPSなど上のレベルから今後の方針を決めてもらうのが重要ではないか(仁科委員)、オープンアクセスを推進するなら根本的なシステムから変える必要があることを、政府やJSPSに働きかけるのが重要ではないか(深川委員)、日本の場合、大学が個別にRead & Publish 契約をしても状況は変わらないので、国レベルの対応が必要なのは(西山委員)、

というような意見が出されました。

前半の講演が少し長くなってしまったため、パネルディスカッションの時間があまり取れなかったのは残念でしたが、アンケートの内容から参加者が非常に高い関心を持っていること、当事者としての危機感を抱いてくれていること、アンケートに回答してくれた9割以上の参加者が「とても面白かった」、あるいは「面白かつ

た」と回答してくれたことから、とても有意義なセミナーになったのではないかと思います。改めて、貴重な講演をしていただいた Matthew Lane さん、湯浅 達朗さんに感謝申し上げます。

(文責：座長・中山 潤一)

※本セミナーの参加者アンケート結果及び講演資料の一部は学会 HP でご覧いただけます。